

教育社会学の〈生-政治〉論的転換

— 社会化の史的構築とその分析 —

加藤 隆雄 (南山大学)

ミシェル・フーコーが後期の著作で用い、ネグリ&ハート、アガンベンらによって用いられた〈生-政治 (bio-politique)〉または〈生-権力 (bio-pouvoir)〉の概念は、日本で1990年代以降進展してきた自己や内面への関心の高まりや「心理主義化」から市民性・公共性の変貌のような現象まで、現代社会の分析に有効である。とはいえ、フーコーによれば、この〈生-政治〉の始点は、17世紀もしくは18世紀半ばにある。本報告の目的は、フーコーの用いた〈生-政治〉の概念の概略を述べて、それが教育社会学が対象としてきた領域における分析にとって有効な概念であることを示すことであるが、特に、〈生-政治〉の開始点により近い19世紀のデュルケムの「社会化 (socialisation)」の概念・理論形成における〈生-政治〉の作用を取り上げる。そして、それ以降における社会化の研究が〈生-政治〉の展開形態であり、教育社会学の研究自体が、〈生-政治〉の介入により構築されているという事態の一端を捉えたいと考える。

教育研究がフーコーの思想に注目し始めたのは1980年代である。そこでフーコー中期の著作(主として『監獄の誕生』)は、アリエス、ブルデューの議論と絡められながら、教育の相対化・装置としての学校・規律=訓練・権力としての知といった観点から取り上げられた。日本では1970年代来、フーコーは「構造主義」の思想家として位置づけられていたのだが、上記のような観点は、フーコーの思想全体から見て本質的なのか部分的なのかという点は明らかではなかった。

しかし、フーコー後期の思想まで射程に入れるならば、彼はある意味一貫して〈生-政治〉の研究をめざしてきたといえる。社会秩

序に適合するような人間の心身を作り上げる力が〈生-権力〉であり、その作動と交錯の領域が〈生-政治〉である。後期著作の『性の歴史 第1巻 知への意志』(1976)の中で、人々(国家の国民)に対して働く〈生-権力〉の二つの極が示される。フーコーは、一方を「規律 (discipline) を特徴づけている権力の手続き」、「人間の身体解剖-政治学 (anatomy-politique)」と呼ぶ。1980年代以降、教育研究においてフーコーの思想として取り上げられたのは、〈生-権力〉のこちらの極であった。他方、「種である身体、生物の力学に貫かれ、生物学的プロセスの支えとなる身体というものに中心を据え」、「繁殖や誕生、死亡率、健康の水準、寿命、長寿、そしてそれらを変化させるすべての条件」を引き受ける「一連の介入・調整する管理」が「人口の生-政治」と呼ばれるものである。

最初期の著作『精神疾患と心理学』(1954)で「狂気」が病気であるのはアナロジーを通じてであるということを示したフーコーは、『古典主義時代における狂気の歴史』(1961)で、個々人の内面・心を治療の対象として精神医学が可視化していくことを述べていくが、その歴史は内面や精神が、個々人の統制を超えた抽象的システムに組み込まれる過程でもあった。『言葉と物』(1969)で扱われるのは「人間」という観念の生成であり、人間が人間自身を対象とするまなざしを形成する過程であった。人間にとって、人間の身体とその作動が科学的探究の対象として措定されていくプロセスは、〈生-権力〉にとっての、その対象の発見であったと考えられる。『監視と処罰 (邦訳: 監獄の誕生)』(1975)でフーコーは、刑罰のあり方の変化を通じて、権力が身

体へと作用する歴史的プロセスを描いた。近代初期に、人間の身体は刑罰の直接対象（身体刑）であることを止め、処罰はまずその外側の管理（規律正しい身体）に向けられ、さらに身体を通してその内面へと向かう。つまり、身体が、外的・直接的・物理的力によって蹂躪される対象から、規律権力によって成型され、〈生－権力〉によって介入を受ける対象となるプロセスが述べられたのである。「主体と権力」などで用いられた「牧人＝司祭型権力 (pastoral power; pouvoir pastoral)」は、キリスト教の「告解」が、個々人に内面というものを振り返らせることで、内面という空間を作り出す作用を指摘するための概念であった。『性の歴史 第1巻』においてフーコーは、歴史的な資料にもとづきながら、自己の中核として「性」というものが作り出された過程を明らかにしていくなかで、〈生－権力〉・〈生－政治〉という概念を用いるに至る。このようにフーコーの著作群は、人間の自己・精神・身体に及ぶ作用の研究を志向していた。身体の外郭に沿って、または身体の内側へ、心身の生産と再生産へとこの作用は及ぶ。この作用がフーコーの〈生－権力〉なのであり、権力の生成・行使・交錯のあり方が〈生－政治〉なのである。

してみると、人々の自己や社会的アイデンティティを構成するものとしての教育の作用は、〈生－政治〉と密接にかかわることになることがわかる。19世紀から20世紀にかけて進んできた国民教育の歴史こそ、〈生－政治〉の場であったということが出来る。

教育の作用の中核として位置づけられてきた概念が、社会化の概念である。ところで、この社会化に関わる言説はこれまで二つの前提を有していた。

(α) 近代社会において社会化の契機が発見された

(β) 社会化は普遍的に見られる過程である

これらが相互に矛盾するものであることは明

らかである。デュルケムが『教育と社会学』で取り上げたのは(α)の側面であった。しかし、パーソンズ以降の社会化研究からは、社会化が近代社会の必要条件であるという面は次第に薄れていき(β)のように心理学的な発達研究の社会学版ということになっていった。しかし、そもそものデュルケムの時点で矛盾は存在している。デュルケムにおいてそれは、「特殊な社会集団(カースト、階級、家族、職業)が、それに所属しているすべての者に同様に存在しなければならないとみなす若干の肉体的および精神的状態」と「子どもが属している社会が、そのいかなる成員にも欠如してはならないと考える肉体的及び精神的一定状態」との区別という仕方で立てられている。デュルケムは、しかし、「子どもが属している社会的範疇とは無関係に、教育がすべての子どもに対して教え込むべき一定数の観念、感情、慣行を自己のうちに保有していない民族は存在しない」と述べて、市民社会への参入を「方法的社会化」という語で示したのである。(β) タイプの社会化研究は、デュルケムのこうした社会化論を、脱政治化・超近代化することで生成されてきた。

デュルケム理論において、市民社会の一員として子どもの内面を構成するという点において、フーコーの述べる〈生－権力〉の介入が認められ、社会化論が〈生－政治〉の場となったことがわかる。第三共和政の社会的混乱の中での理想を述べたと考えられているデュルケムの思想は、個々の生が社会の支配のもとに置こうとする〈生－政治〉の場として読み解くことができる。デュルケムは、個々の生において(β)の社会化のプロセスを、社会の中のプロセスとして捉えなおした。個々の社会化を社会のものとする(社会化)という意味での「社会化の社会化」こそが、〈生－政治〉のありようなのであり、このような個々の生を社会中に位置づけるという形でスタートした教育社会学研究の全体像こそ、今後生－政治の理論によって読み解かれるべきである。